

Self-Control System of Goal-Directed Activities : A Study on the Process Attaining "Level of Aspiration" (4)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/20585

目標追求活動における自己調整システムに関する研究: 要求水準の達成過程の分析(4)

太田 雅夫

Self-control system of goal-directed activities : A Study on the Process Attaining "Level of Aspiration" (4)

Masao OHTA

I 目 的

筆者は、これまで集団目標及び集団業績の調整過程を検討し、集団システムを解明することを主な目的として一連の実験を行ってきた。集団の目標追求過程における動的システムの特性を解明する試みの一環として、諸変数間の相互の関連をみようとした。集団内の各成員の活動が集団過程に及ぼす影響については、これまでも取り上げて検討してきた。また、個人的調整機能の相違する成員によって集団を編成し、その集団過程への影響についての検討を加えたこともあった。

また、個人の目標追求過程に関してもこれまで研究し、個人の目標追求活動における自己調整システムを検討した(1981 a, 1981 b, 1981 c, 1982)が、ここでも、集団成員としてではなく個人としての目標追求過程を検討することにした。要求水準研究に類する実験を行い、要求水準の達成過程を分析することになる。しかし、要求水準に関する概念や理論を動的システムの側面から発展させ、フィードバック情報やフィードフォワード情報が個人の目標追求過程の調整に如何なる効果を及ぼすか等を実験結果によって確かめることが主なねらいであった。

II 方 法

被験者は金沢市内の公立小学校6年生3クラス
の104名で、男子は46名、女子は58名

であった。実験に用いた作業は、筆者が集団実験(1985)で用いたものと同様の抹消検査で、420の数字から成る乱数系列の中から、特定の2種類の数字を丸で囲むというものであった。練習の後、12試行を各試行30秒ずつ行った。被験者には毎回試行の始めに目標を設定させ、作業後には自己評価と原因帰属を行わせた。目標設定は、目標として、「何個できると思えますか」を記入させ、作業後に、正しく○で囲んだ数(合計)を記入させた。また、自己評価として、「あなたがたてた目標と比べて、結果はどうでしたか。」と尋ね、「よかった」、「まあまあよかった」、「すこしわるかった」、「わるかった」のいずれかに印をつけさせた。課題が最大化課題か、最適化課題かの区別は明示しなかったが、この場合の目標設定及び自己評価のさせ方から判断して、被験者が最大化課題と受け取ることが普通であろうと思われた。最後に17項目から成る達成動機づけ尺度に記入させた。しかし、ここでは原因帰属の結果及び達成動機づけ尺度値は取り扱わないので、詳細は省略する。

III 結 果

1. 目標設定に関連する要因

$-E^{-1}\varepsilon_k(t)$ に対する $\Delta G_k(t)$ の回帰係数及び相関係数を性別、回帰の定数項 C 及び α_{1715} の水準別に示すと図1の通りとなる。この図には、有意な回帰を示す者が掲載されているが、有意な回帰を示す者の比率をみると男子は

図2 (女子、44人)

	Na	C	α_{1712}	α_{1711}	F	Na	C	α_{1712}	α_{1711}	F
0	55	-3.841	.337	-.176	6.142*	103	-8.628	.773	-.401	15.775***
	28	-2.915	.398	-.246	5.128*	13	-2.006	.679	-.475	14.266***
	16	-3.881	.464	-.326	5.270*					
	98	-.995	.380	-.432	8.023*					
	53	.894	.379	-.454	14.214***					
	89	9.478	.227	-.492	28.939***					
.5	93	3.013	.467	-.542	13.386***	63	-.661	.604	-.521	7.633*
	92	10.811	.254	-.554	4.956*	62	-7.773	.850	-.602	5.210*
	88	3.190	.485	-.583	28.982***	56	4.987	.602	-.746	7.076*
	46	3.753	.489	-.584	4.649*	104	-3.055	.922	-.765	102.067***
	64	6.349	.350	-.588	19.107***	85	3.868	.652	-.780	39.613***
	57	13.069	.302	-.614	24.123***	87	3.246	.702	-.798	25.301***
	27	8.957	.219	-.669	6.337*	51	9.453	.531	-.841	24.462***
	54	8.994	.402	-.702	10.476***	18	-3.772	1.097	-.842	91.267***
	84	16.331	.083	-.809	6.536*	102	.501	.928	-.860	27.277***
	14	8.673	.499	-.838	10.299**	45	-2.878	1.047	-.876	23.956***
	96	10.368	.364	-.838	5.557*	60	2.152	.950	-.957	148.399***
	50	21.157	.153	-.909	4.985*					
-1	100	14.710	.451	-1.001	107.769***	90	8.709	.726	-1.000	14.803***
	12	21.976	.290	-1.905	11.176***	101	25.169	.598	-1.133	11.502***
	21	2.932	.365	-1.013	6.964*	25	18.803	.616	-1.273	6.771*
	52	18.566	.255	-1.104	7.705*	47	13.092	.761	-1.300	20.353***
	15	25.710	.331	-1.185	12.055***	91	22.475	.518	-1.343	29.016***
	26	18.718	.255	-1.348	9.751**					
	86	39.230	.106	-1.436	44.223***					
	23	32.805	.350	-1.513	14.179***					

注) 回帰が有意な者を示す。

の水準別に示すと図2の通りとなる。有意な回帰を示す者の比率は、男子で78.3%、女子で75.9%、全体で76.9%となり、AD_kに対する $\Delta G_k(t)$ の関連よりも若干高い比率となっている。回帰の定数項Cは男女を通してみると、49強から-8強までに互り、かなり変動が大きい。 α_{1712} は、男子では殆どの者が正であるけれども、数名は負となっている。女子では総て正で、かなり大きな値となる場合もみられる。また、 α_{1711} は男女を通じて総て負となる。 α_{1712} が負となる者の α_{1711} はさらに著しい負の値となる。この結果は図1のAD_kに対する目標の変化量の強い正の関連と符合すると考えることができる。この結果も集団の目標追求過程においてみられた傾向と類似している。

2. 業績に関連する要因

D_kに対する $\Delta P_k(t)$ の回帰係数及び相関

図3 D_kに対する $\Delta P_k(t)$ の回帰係数及び相関係数(男子、18人)

	Na	C	α_{1916}	F	r	Na	C	α_{1916}	F	r
0	8	4.309	.808	10.706*	.737	7	6.809	1.498	15.437***	.795
	31	2.636	.848	5.243*	.607	70	5.315	1.162	8.172*	.690
						76	3.209	2.076	28.950***	.873
						1	2.437	1.040	6.418*	.645
						3	2.423	1.456	7.823*	.682
1	77	.558	.877	17.780***	.815	43	.827	1.011	11.941**	.755
0	75	-1.380	.536	7.688*	.679	44	-.379	1.433	6.360*	.644
	69	-2.515	.959	8.465*	.696	5	-.791	1.170	10.313*	.731
						68	-1.832	1.154	72.310***	.943
						81	-1.865	1.709	7.919*	.684
						67	-2.666	1.753	9.911*	.724
						37	-4.512	1.237	13.142**	.770
						80	-7.759	1.379	8.774*	.703

注) 回帰が有意な者を示す。

図3 (女子、23人)

	Na	C	α_{1916}	F	r	Na	C	α_{1916}	F	r
0	49	5.287	.828	7.736*	.680	84	5.995	1.346	14.435***	.785
	99	4.480	.886	5.816*	.627	53	4.051	1.302	5.996*	.632
	20	3.429	.857	5.226*	.606	27	4.019	1.650	16.790***	.807
	17	3.317	.785	12.323**	.760	97	3.978	1.250	13.905**	.779
						100	3.087	2.079	12.266**	.760
						22	3.048	1.061	9.853*	.723
						23	1.957	1.460	30.578***	.879
						86	1.156	1.143	7.921*	.684
						12	1.095	1.204	7.891*	.684
1	59	.923	1.021	9.336*	.714	55	.909	1.356	9.819*	.722
	54	.534	1.576	8.144*	.689					
0	58	-.305	1.119	9.973*	.725					
	95	-.771	1.069	9.928*	.724					
	15	-.953	1.043	5.395*	.612					
-1	25	-1.714	1.414	31.541***	.882					
	92	-2.546	1.067	5.885*	.628					
	19	-3.242	1.299	17.439***	.812					
	101	-6.249	1.409	12.376**	.761					

注) 回帰が有意な者を示す。

係数を性別、回帰の定数項C及び α_{1916} の水準別に示すと図3の通りとなる。有意な回帰を示す者の比率をみると、男子は39.1%、女子は

39.7%、全体では39.4%で、この比率は男女差が小さく、総じてあまり高くない。回帰の定数項Cは7弱から-8弱に至るまで幅広く分布している。 α_{1916} は総て正で、1を超えるものが多い。 D_k と $\Delta P_k(t)$ の相関係数も、6以上でかなり高い。要するに業績の変化量は、目標差に関連する者が4割弱いるが、有意に関連する者の場合には強く関連することが判る。この結果も集団の目標追求過程においてみられた傾向と類似している。なお、この D_k を、 ΔG_k

図4 $G_k(t)$ 及び $E^{-1}P_k(t)$ に対する $\Delta P_k(t)$ の重回帰係数 (男子, 34人)

	No	C	α_{1911}	α_{1912}	F	No	C	α_{1911}	α_{1912}	F
0	81	22.253	.921	-1.931	12.483***					
	76	26.087	.908	-1.807	14.453***					
	37	21.931	.637	-1.512	10.645**					
	80	24.974	.606	-1.746	16.801***					
	30	25.684	.558	-1.439	4.899*					
	3	21.339	.532	-1.310	4.998*					
	68	18.862	.528	-1.112	37.931***					
-5	1	25.488	.313	-1.317	7.804*	8	17.066	.375	-.991	5.806*
	70	37.156	.257	-1.267	6.476*					
	75	35.697	.183	-1.306	8.850**					
	77	42.160	.182	-1.650	27.283***					
	71	44.158	.152	-1.546	10.349**					
	67	41.455	.071	-1.312	7.013*					
	73	25.478	.029	-1.155	6.828*					
	9	18.355	.017	-1.076	4.510*					
	35	18.640	.016	-1.023	4.583*					
	39	18.640	.016	-1.023	4.583*					
0	66	35.850	-.014	-1.207	6.220*	29	32.949	-.399	-.982	5.334*
	41	33.729	-.131	-1.113	7.756*	38	35.059	-.499	-.781	4.925*
	31	35.335	-.200	-1.036	4.801*					
	2	40.187	-.280	-1.338	10.187**					
	5	43.232	-.455	-1.432	9.618**					
-5	43	47.233	-.518	-1.546	11.381***	4	42.120	-.568	-.842	10.679**
	7	42.190	-.560	-1.236	7.830*	40	20.939	-.608	-.194	6.129*
						42	32.413	-.614	-.524	4.524*
						78	27.485	-.813	-.570	5.069*
-1	11	58.076	-1.103	-1.013	4.681*	32	49.419	-1.940	.078	6.073*
	82	43.122	-1.550	-.267	13.890***					

注) 回帰が有意な者を示す。

+印のNo32は、 α_{1911} の値が正であるが、負の欄に記載してある。

図4 (女子, 40人)

	No	C	α_{1911}	α_{1912}	F	No	C	α_{1911}	α_{1912}	F
0	25	14.583	1.017	-1.627	30.749***					
	101	11.058	.912	-1.319	6.964*					
	23	23.387	.867	-1.612	24.852***					
	97	30.938	.777	-1.559	14.335***					
	59	14.653	.553	-1.156	5.750*					
	100	28.784	.513	-1.467	6.330*					
-5	17	20.575	.426	-1.141	8.777**					
	12	25.952	.380	-1.180	4.839*					
	89	24.086	.289	-1.346	13.081***					
	99	31.554	.265	-1.131	5.156*					
	22	23.004	.252	-1.109	5.905*					
	15	30.129	.172	-1.227	5.813*					
	28	17.581	.162	-1.057	5.485*					
	46	25.359	.128	-1.094	4.714*					
	55	34.855	.081	-1.377	7.513*					
0	58	34.019	-.026	-1.360	8.526*	49	34.244	-.076	-.997	5.056*
	16	34.297	-.069	-1.267	7.305*	13	23.479	-.197	-.950	5.380*
	26	26.377	-.079	-1.226	8.890**	21	28.095	-.209	-.781	7.292*
	20	37.387	-.143	-1.130	5.416*	98	33.156	-.225	-.904	4.513*
	27	40.459	-.159	-1.578	14.494***	60	27.430	-.266	-.663	4.656*
	53	38.428	-.201	-1.193	6.711*	14	42.105	-.479	-.890	6.849*
	48	36.269	-.313	-1.001	6.459*					
	52	39.080	-.377	-1.250	7.546*					
	92	46.645	-.381	-1.078	5.751*					
	96	37.197	-.403	-1.313	9.948**					
	93	43.430	-.473	-1.064	6.750*					
	84	46.312	-.484	-1.281	7.802*					
-5	24	89.863	-3.413	-1.271	8.819**	45	18.793	-.625	-.068	5.269*
						104	46.161	-.679	-.816	10.395**
						57	37.890	-.749	-.218	6.870**
						103	39.811	-.906	-.760	12.269***
						87	30.280	-1.360	-.110	8.904**
						88	71.726	-2.186	-.485	18.115***

注) 回帰が有意な者を示す。

(t) 及び $E^{-1}\epsilon_k(t)$ に分解し、これらに対する $\Delta P_k(t)$ の重回帰係数及び重相関係数の検討も行ったが、あまり顕著な関連が認められなかったため、ここでは省略する。

D_k に対する $\Delta P_k(t)$ の関連を一般的にみるため、 D_k の変数 $G_k(t)$ 及び $E^{-1}P_k(t)$ のそれぞれに対する $\Delta P_k(t)$ の重回帰係数を性別、回帰係数 α_{1911} 及び α_{1912} の水準別に示すと図4の通りとなる。有意な回帰を示す者は、男子は73.9%、女子は69.0%、全体では71.2%である。 D_k に対する $\Delta P_k(t)$

の回帰より有意となる者の比率は大きい。回帰の定数項Cはすべて正で、10代から70代にまで亘っている。男子、女子とも、 α_{1911} は正と負の両方に分布しているが、 α_{1912} は男女を通じて1名を除いて総て負となる。 α_{1911} が負となる者の α_{1912} はさらに著しい負の値となることが多いが、 α_{1911} が負の著しい値になる場合には、この傾向はみられない。

3. 目標達成度の評価に関する要因

$-\epsilon_k(t)$ に対する $V_k(t)$ の回帰係数及び相関係数を性別、回帰の定数項C及び α_{1415} の水準別に示すと図5の通りとなる。有意な回帰を示す者は、男子は87.0%、女子は94.8%、全体では91.3%であり、著しく多い。回帰の定数項Cは総ての者が正で、2から4弱で、ほぼ一定している。これは $V_k(t)$ の評定値に関連していると考えられる。 α_{1415} も総て正で、領域の幅も狭く、1から、3までに殆どの

図5 $-\epsilon_k(t)$ に対する $V_k(t)$ の回帰係数及び相関係数（男子、40人）

C	1					3					25				
	No	C	α_{1415}	F	r	No	C	α_{1415}	F	r	No	C	α_{1415}	F	r
1	6	3.630	.129	20.943***	.823	5	3.660	.325	90.970***	.949	8	2.482	.160	34.890***	.882
	3	3.496	.080	16.157***	.786	9	3.331	.284	95.042***	.951	77	2.485	.194	16.271***	.787
	41	3.401	-.108	11.234**	.727	10	3.111	-.259	43.339***	.901	32	2.410	.160	49.612***	.912
	80	3.327	-.199	55.309***	.920	38	3.054	.234	88.152***	.948	4	2.408	.158	22.898**	.834
						44	3.043	.303	28.761***	.861	40	2.336	.165	104.294***	.955
3	67	2.926	.151	15.562***	.780	79	2.951	.204	55.544***	.921	83	2.321	.180	36.105***	.885
	70	2.899	.107	13.296***	.756	69	2.901	.269	22.635***	.833	42	2.274	.123	33.418***	.877
	71	2.865	.183	52.377***	.916	35	2.845	.235	152.312***	.969	2	2.165	.163	26.380***	.892
	37	2.679	.154	77.326***	.941	72	2.814	.240	21.965***	.829					
	78	2.656	.165	16.458***	.789	30	2.797	.203	157.354***	.970					
	65	2.649	.180	25.231***	.846	66	2.785	.237	29.829***	.865					
	43	2.618	.158	20.316***	.819	31	2.784	.217	16.588***	.790					
	11	2.602	.185	77.839***	.941	29	2.610	-.210	37.606***	.889					
	74	2.582	.166	154.245***	.969	34	2.603	.238	68.438***	.934					
	73	2.508	.145	8.271*	.673	81	2.543	.279	63.192***	.929					
25	33	2.502	.159	36.344***	.886										

注) 回帰が有意な者を示す。

図5（女子、55人）

C	1					3					25				
	No	C	α_{1415}	F	r	No	C	α_{1415}	F	r	No	C	α_{1415}	F	r
1	101	3.751	.170	12.351**	.743	18	3.230	.211	44.076***	.903	94	2.480	.173	26.336***	.851
	25	3.407	.171	18.545***	.806	56	3.146	.208	27.230***	.855	53	2.463	.143	53.495***	.918
	50	3.368	.069	7.682*	.659	47	3.123	.236	40.648***	.896	15	2.449	.189	95.320***	.951
	13	3.282	.158	16.749***	.791	89	3.042	.266	69.416***	.935	90	2.418	.092	7.757*	.661
	49	3.234	.089	5.737*	.604						92	2.402	.151	44.799***	.904
	16	3.002	.198	20.030***	.817						55	2.387	.169	33.100***	.876
											63	2.351	.175	71.429***	.937
											99	2.321	.125	34.781***	.881
3	97	2.996	.120	25.937***	.850	45	2.915	.271	65.016***	.931	52	2.312	.193	52.403***	.916
	104	2.969	.131	48.898***	.911	58	2.908	.299	131.042***	.964	98	2.291	.163	44.931***	.904
	103	2.889	.167	52.059***	.916	54	2.815	.204	37.587***	.889	28	2.241	.138	15.439***	.779
	17	2.815	.160	19.464***	.813	86	2.796	.224	141.868***	.967	24	2.061	.077	20.737***	.821
	84	2.802	.110	11.564**	.732	96	2.789	.267	45.698***	.906	19	1.887	.145	15.620***	.781
	61	2.785	.143	33.675***	.878	57	2.763	.288	69.806***	.935					
	20	2.718	.175	35.719***	.884	46	2.762	.244	21.406***	.826					
	48	2.710	.152	22.755***	.834	85	2.704	.255	52.751***	.917					
	95	2.688	.148	74.322***	.939	64	2.699	.226	58.970***	.925					
	22	2.672	.191	65.911***	.932	12	2.669	.243	34.014***	.879					
91	2.611	.168	50.805***	.914	100	2.555	.213	91.229***	.949						
102	2.590	.179	25.652***	.848	88	2.501	.215	57.071***	.922						
60	2.529	.092	8.934*	.687											
93	2.525	.166	67.407***	.933											

注) 回帰が有意な者を示す。

者が集中している。 $-\epsilon_k(t)$ と $V_k(t)$ との相関係数も極めて高い。このことはt試行における AD_k によって評価がなされていること、しかも最大化課題における評価の特徴を示しているといえる。この結果も集団の目標追求過程においてみられた傾向と類似している。

AD_k に対する $V_k(t)$ の関連を一般的にみるため、 $-\epsilon_k(t)$ の変数 $P_k(t)$ 及び $G_k(t)$ のそれぞれに対する $V_k(t)$ の重回帰係数を性別、回帰係数 α_{1412} 及び α_{1411} の水準別に示すと図6の通りとなる。有意な回帰を示す者は、男子は89.1%、女子は91.4%、全体では90.4%である。これは、 $-\epsilon_k(t)$ に対する $V_k(t)$ の有意な回帰の比率とほぼ同様である。

回帰の定数項Cは、-6弱の者から10弱の者までかなり広い範囲に分布する。男女の総ての者が α_{1412} は正であるが、 α_{1411} は一貫して負の値をとっている。この結果は、 $-\epsilon_k(t)$ に対する $V_k(t)$ の回帰係数と符合するものである。

IV 考 察

ここでは、個人の目標追求過程を要求水準研究の実験を用いて行い、その結果を検討した。これまで筆者が行った一連の個人実験や集団実験と符合した結果が得られた。しかし、集団実験では、認められることの多かった傾向が、ここでは認められないというものもあった。例えば、 D_k を、 $\Delta G_k(t)$ 及び $E^{-1}\epsilon_k(t)$ に分解し、これらに対する $\Delta P_k(t)$ の重回帰係数の検討も行ったが、あまり顕著な関連が認められなかった。このような結果から、個人の目標追

図6 (女子、53人)

No.	C	α_{1412}	α_{1411}	F	No.	C	α_{1412}	α_{1411}	F
90	.761	.134	-.059	14.425***	27	-3.089	.283	-.038	19.392***
48	-.042	.186	-.080	13.764***	60	-.890	.215	-.095	8.981**
101	-.451	.188	-.083	12.886***					
104	.742	.168	-.095	28.602***					
95	.026	.173	-.098	47.693***					
92	.488	.163	-.106	21.895***	62	-.069	.212	-.100	9.091**
97	2.024	.134	-.106	13.720***	94	-.556	.208	-.105	14.062***
53	1.612	.153	-.119	25.486***	103	.806	.205	-.118	25.845***
24	3.052	.066	-.119	9.605**	102	.131	.226	-.138	16.407***
17	1.399	.187	-.128	11.937**	86	.096	.247	-.156	90.042***
91	1.009	.190	-.131	26.645***	23	-2.405	.327	-.158	15.438***
28	2.241	.138	-.138	6.947*	15	1.610	.200	-.171	45.194***
84	3.697	.106	-.144	5.257*	12	-.300	.270	-.176	17.201***
93	2.292	.168	-.160	30.391***	14	.332	.249	-.183	49.018***
13	4.062	.136	-.173	7.828*	18	1.754	.246	-.188	22.990***
25	3.894	.162	-.181	8.720**					
98	3.539	.140	-.185	22.847***					
52	2.006	.198	-.185	23.657***					
55	2.951	.165	-.187	15.020***					
63	3.431	.154	-.193	40.491***					
61	5.468	.121	-.226	22.901***	56	3.081	.209	-.207	12.256***
20	4.863	.152	-.232	18.925***	47	2.455	.248	-.219	18.892***
87	3.543	.179	-.233	99.616***	64	2.532	.228	-.222	26.662***
54	4.036	.194	-.235	18.177***	100	3.252	.204	-.229	41.664***
22	3.914	.185	-.239	34.169***	45	1.122	.322	-.251	38.105***
16	4.992	.166	-.245	9.783**	59	1.797	.282	-.251	16.121***
88	5.280	.186	-.290	27.857***	85	3.233	.245	-.262	24.278***
46	5.744	.195	-.306	11.974**	89	3.135	.262	-.266	31.272***
99	-.134	.158	-.868	42.273***	58	1.945	.307	-.268	61.263***
					57	1.251	.319	-.279	35.794***
					51	2.520	.280	-.281	96.659***
					96	3.439	.256	-.286	20.704***

図6 P_k(t)及びG_k(t)に対するV_k(t)の重回帰係数(男子、41人)

No.	C	α_{1412}	α_{1411}	F	No.	C	α_{1412}	α_{1411}	F
41	-.861	.175	-.012	14.142***	75	-5.815	.241	-.015	11.894***
67	-3.019	.191	-.017	12.794***	78	-.610	.221	-.055	10.734***
43	-.428	.184	-.047	13.262***	4	-2.184	.231	-.075	18.103***
3	2.491	.093	-.053	8.415**					
70	2.012	.115	-.087	6.252*					
73	.823	.180	-.099	4.259*					
6	2.771	.143	-.105	9.884**	2	-.065	.201	-.111	13.850***
8	.711	.199	-.118	19.215***	11	-.574	.231	-.114	51.027***
37	1.810	.163	-.134	42.156***	82	-2.461	.322	-.123	108.020***
42	3.028	.111	-.138	15.473***	40	.667	.201	-.138	64.958***
32	2.517	.159	-.163	22.340***	80	1.374	.232	-.162	35.027***
65	1.933	.195	-.168	11.706***	30	1.728	.219	-.180	87.589***
33	3.032	.155	-.177	16.645***	77	1.790	.206	-.184	7.470*
71	2.822	.183	-.182	23.571***	66	1.107	.256	-.199	13.994***
74	3.196	.157	-.183	77.800***	81	-1.200	.359	-.199	79.566***
29	4.960	.169	-.269	20.089***	79	3.052	.203	-.207	25.014***
					5	.542	.348	-.215	47.921***
					36	3.641	.224	-.248	73.435***
					10	3.256	.256	-.262	19.526***
					9	2.644	.305	-.266	44.819***
					76	3.495	.227	-.271	89.564***
					69	3.590	.266	-.289	10.254***
					34	5.212	.207	-.291	41.057***
83	6.575	.159	-.301	26.426***	38	5.975	.205	-.309	56.620***
31	9.637	.160	-.418	14.011***	44	3.793	.296	-.320	13.168***
					72	4.729	.244	-.322	13.516***

↑ .1
α₁₄₁₁
注) 回帰が有意な者を示す。

↑ α₁₄₁₁
注) 回帰が有意な者を示す。

求過程でのフィードフォワード情報及びフィードバック情報が如何なるものかについては、さらに検討しなければならないと思われた。

付記

ここで分析した実験結果は、霜野成己が昭和61年度に金沢大学教育学部(教育心理学専攻)在籍中、卒業実験として実施したもので、筆者が観点を改めて分析したものである。

参考文献

Atkinson, J. W. & Litwin, G. H. 1960 Achievement motive and test anxiety conceived as motive to approach success and motive to avoid failure. Journal of Abnormal and Social Psychology, 60, 52-63.

- Bills, R. E. 1953 A comparison of scores on the index of adjustment and values with behavior in level of aspiration tasks. *Journal of Consult. Psychology*, 17, 206—212.
- Clark, R. A., Teevan, R. & Ricciuti, H. N. 1956 Hope of success and fear of failure as aspects of need for achievement. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 53, 182—186.
- Festinger, L. 1942 Wish expectation, and group standard as factors influencing level of aspiration. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 37, 184—200.
- 林 保 1967 達成動機の理論と実際 誠信書房
- 林 保 山内弘継 1978 達成動機の研究 誠信書房
- 岩田茂樹 1958 最近の要求水準の研究 児童心理 12, 2, 72—77
- Lewin, K., Dembo, T., Festinger, L. & Sears, P. S. 1944 Level of aspiration, in J. McV. Hunt (Ed.) *Personality and the behavior disorders* voll. Ronald Press, 333—378.
- 宮本美沙子（編著）1979 達成動機の心理学 金子書房
- Moulton, R. W. 1965 Effects of success and failure on level of aspiration as related to achievement motives. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 399—406.
- 太田雅夫 1957 討議集団の自己調整機構の研究 I 心理学研究, 28, 74—85
- 太田雅夫 1974 集団の自己調整システム 金沢大学教育学部紀要, 23, 181—195
- 太田雅夫 1975 集団の自己調整システム——フィードバック情報による集団目標と集団業績の調整——金沢大学教育学部紀要, 24, 17—30
- 太田雅夫 1976 集団課題解決におけるコミュニケーションの役割 金沢大学教育工学研究, 1, 71—85
- 太田雅夫 1981 a 目標追求活動における自己調整システム——要求水準実験の一考察——金沢大学教育学部紀要, 29, 1—9
- 太田雅夫 1981 b 目標追求活動における自己調整システム——要求水準の達成過程の分析(1)——金沢大学教育工学研究, 7, 105—113
- 太田雅夫 1981 c 目標追求活動における自己調整システム——要求水準の達成過程の分析(2)——金沢大学教育学部紀要, 30, 235—247
- 太田雅夫 1982 目標追求活動における自己調整システム——要求水準の達成過程の分析(3)——金沢大学教育学部 教育工学研究, 第 8 号, 49—60
- Rosen, B. & D' Andrade, R. 1959 The psychological origins of achievement motivation. *Sociometry*, 22, 185—218.
- 佐治守夫 1951 要求水準と現実度 心理学研究, 21, 3・4, 56—69
- Steiner, I. D. 1957 Self-perception and goalsetting behavior. *Journal of Personality*, 25, 344—355
- 高野清純 1973 成功経験の心理学 金子書房
- 続有恒・太田雅夫 1958 集団の自己調整機構の研究 II 心理学研究, 29, 253—263
- Wylie, R. 1961 *The self concept*. University of Nebraska Press
- Zander, A. & Medow, H. 1965 Strength of group and desire for attainable group aspirations. *Journal of Personality*, 33, 122—139
- Zander, A. 1967 Group aspirations, in Cartwright & Zander (Eds.) *Group dynamics*